

てこな・ミュージック・ジャーナル

馬車の時代

旅をするには

春から初夏を迎えると旅に出たくなります。現代は車、新幹線、飛行機と選択は自由です。でも、パッハ、ベーターヴェン、モーツァルト、ショパンなど、誰一人として汽車はもちろん、車など想像すらしない時代に生きていました。乗るものと言えば、馬か馬車でした。汽車そして自動車が見れるのは、19世紀後半です。汽車はイギリス、自動車産業はドイツで盛んになりましたが、交通手段の発達音楽家の趣味を広げました。1892年にアメリカに渡ったドヴォルザークはグランド・セントラル駅に毎日出かけ、機関車の車両番号を記録するほどの鉄道マニアでした。プッチーニは大変な自動車ファンとなって、フォードが発売を始めた1903年、愛車の前で得意げにポーズを取っている写真が残っています。

馬車がほしい

19世紀の文豪バルザックはパリの生活を興味深く観察しています。「パリで大きな顔をしたかったら、馬は3頭、昼間は2人乗りの二輪馬車、夜は箱型四輪馬車」、その維持費だけでも、現在の金額に換算すると900万円。相応しいたはずまいになるためには仕立て服、オートクチュールのドレス、誂えた靴、香水にも凝る必要があります。バルザック研究家の鹿島茂氏によると、総額はなんと2500万円にも相当するとか。

そんな生活ができる層はほんの数パーセント。他の多くは貧困にあえぎ、屋根裏部屋で重なるようにその日暮らしをしています。

パリ市内はいつも、馬車であふれていました。朝は郊外から野菜を運ぶ馬車がひしめき、太陽が昇ると、魚、肉、花売りの行商人が声を張り上げ、石畳の片隅には靴磨きの少年。その子の傍をかすめるように通る乗り合い馬車、2人乗りの馬車がひしめきあって大変な喧騒だったそうです。

優雅に散歩

昼間の2人乗り馬車の行く先の一つが、優雅な散歩のメッカ、テュルリー公園です。公園入り口にはご主人の帰りを待つ家紋付の馬車がずらりと並びました。

でも公園の中を優雅な風情で歩いているからといって、馬車

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

で来たとは限りません。公園まで歩いて来なければならぬ懐具合のカップルもいました。散歩するに見合う服を着ることはできても、経済的に余裕がないと自家用馬車はもちろんのこと、貸し馬車までも手がまわらないのです。雨でも降ったら、精一杯のお洒落が台無しになってしまいます。馬の糞やドロ、下水の溝からあふれるゴミで汚れたパリの石畳に足を取られたり、磨き上げた靴を汚すことになって、公園の中の優雅な仲間に入り損ねることになりました。

ダンディー、流行に敏感な貴婦人であるためには、馬車が必需品だったのです。

難行苦行

ヨーロッパにおける馬車の歴史はローマ時代に遡るとはいえ、本格的に使われるようになったのは16世紀です。馬車の維持はなかなか大変でした。道は舗装されているわけではありませんから、遠出となると、馬、車輪、車軸は消耗し、乗り手の苦痛も相当なものでした。18世紀の作曲家モーツァルトは成長しても小柄でしたが、それは、幼い頃から父に連れられてヨーロッパ各地を旅したためだと言われています。長時間の悪路に揺られたことが、成長の妨げになったということです。

ところで馬車はどのくらいの速度で走っていたのでしょうか？ 300キロを移動するのに33時間。一日に休憩を4回も取ったせいですが、馬を換えるだけで36時間も走り続けることもあったそうです。

19世紀半ばになると、短い距離でしたが、パリに汽車が走るようになりました。ただ相変わらず、人々が乗るものと言えば馬車でした。スプリングが改良されて街中での乗り心地は良くなりました。でも乗り合い馬車で城壁から街の外、遠出をする悪路のために、その揺れは耐え難いものでした。旅好きの文豪スタンダールは、鼻をぶつけるほど揺れて馬車の中では食事はできない、不潔で臭い、隣から虱を感染される、と不満をぶつけています。

「巨匠が馬車を買いました！」

ショパンが馬車を手に入れたとき、女流作家ジョルジュ・サンドは友人に「巨匠が馬車を買いました」と自慢げに手紙を書いています。バルザックは金持ちの愛人ハンスカ夫人に相応しく馬車を雇い入れて、資金繰りに苦しみました。人々の悲喜こもこもが馬車とともにパリを走っている、自らの文学の主人公のような嘆きを、ため息とともに口にしたとかしないとか...